

稱スルヨリハ寧口醫家備考ト題スルノ穩當ナルニ如カズ」は本文よりもこの備考付録の比重が増したことによると思われる。さらに「本書ノ醫家ニ便益ナルヤ第一版ハ客年五月下旬發行シ同年十月初旬第二版ヲ發シ未ダ幾ナラザルモ今ヤ第三版ノ發行ヲ要セシテ以テ知ル」とあることから、本書が初版以来大変に売れた本であることがわかる。

第十版の例言に「本書ニ掲ケアル實地治療篇ニ於テハ内科…齒科及精神病等ノ治法及處方ヲ掲ク…」とあり、齒科に齒痛、齒齦息肉、齒齦炎、驚口瘡、蝦蟇腫、顔面神経麻痺、三叉神経痛、舌炎などが収載されている。

さらに第十版の例言に「醫家備考篇ハ醫家實地臨床ノ便ト醫學生諸氏ノ學習備忘ノ益ヲ計レル」とし、この「醫家備考篇」に関しては「前版ヨリ掲ケ來レル」の一文があることから第九版からのものであることがわかる。

「○本書ハ出版ヲ重ルニ從ヒ益々醫家ノ好評ヲ博シ初版發行以來茲ニ三年有餘ニ乗ントスルノ今日早ク己ニ第十版ヲ發行スルニ至レリ此ノ如ク醫籍中、稀有ノ賞讃ヲ得タルハ、偏ニ讀者諸氏ノ希望ニ背カサルノ結果ナラザル可ケンヤ」とあることから本書がいかに好評を博したかを知り得る。

この第10版の医家備考編には人工呼吸法、嗎囉吩麻醉法、注射法、臨床検査などがみられる。この人工呼吸法には、第二として「大氣吹入法 假死者ノ鼻孔ヲ閉チ術者ノ口ヲ直チニ假死者ノ口ニ接シ或ハ「カテーテル」ヲ以テ大氣ヲ吹入ス可シ」とあり、現在行われている呼吸吹き込み人工呼吸法と同じものが記載されている。しかし、大氣吹入法の図はなく、図としては、第11図としてマルシャルハル氏法および第12図としてシルヴェステル氏法の図が記載されているのみである。

第14版の例言をみると、文頭に「第十三版ニ著大ノ改正増補ヲ加ヘ出版セル所ニシテ初版以來益醫家ノ好評ヲ博シ實ニ醫籍中、稀有ナル出版ノ數ヲ加ヘ今ヤ第十四版ヲ發行スル」とある。

「一大改訂第十七版例言」の文頭に「今茲ニ發行スル本書第十七版ハ客年七月發行セシ第十六版ニ最モ著大ノ改定増補ヲ加ヘタル所ニシテ」から「一大改訂」とした理由がわかる。また「本版ニ於テ

ハ大イニ改訂シタルヲ以テ前版ニ對照シテ知ルベキカ如ク本書ノ面目ヲ全ク一變シ實ニ一新書ノ觀ヲ呈セリ」とあることから、まさに一大改訂であることがわかる。また、その改正の概略について、「本版ニ於テハ此藥局方篇ニ最モ著大ナル改正増補ヲ加ヘ…第二、實地治療篇ニ於テハ獨逸諸大家ノ處方書ニ由リテ内科、外科、眼科、産科、婦人科、耳科、齒科及精神病等ノ治法及處方ヲ掲ク殊ニ本版ニ於テハ前版ニ叢照シテ知ルベキガ如ク各病ノ治法及處方ニ増補ヲ加エタル所頗ル多シ」とある。

さらに改正の概略について「醫家備考篇ハ隨時須要ノ便覽ニ供スルノ目的ヲ以テ醫家實地臨床ノ便ト醫學生ノ學習備忘ノ益ヲ計リ實地診療上必要ノ事項七十餘章ヲ掲ケタル者ニシテ本版ニ於テハ其各章ニ改訂ヲ加ヘ新タニ二十餘章」とある

以上、明治時代のベストセラーの医書と思われる日本藥局方備考について報告した。

31) 福島尚純著『最近鬱血療法』について

On “Morden Engorgement Therapy” Written by Y. Fukushima

日本大学松戸歯学部 ○山口 秀紀
渋谷 鉦
石橋 肇
池田かのり
鈴木 邦夫
谷津 三雄

Hidenori Yamaguchi, Koh Shibutani, Hajime Ishibashi, Kanori Ikeda, Kunio Suzuki and Mitsuo Yatsu, Nihon University School of Dentistry at Matsudo

今田見信編『続歯学史料アルバムところどころ』3 (67) に『福島尚純は福岡の黒田藩の藩医の家に生れ、東京帝国大学医学部を明治38年に卒業され、佐藤（三吉）外科に入り、助手、講師を永年やられていた。東京大学在職中に「外科総論」や「牙関緊急」の名著がある。また大正5年頃には「口腔外科」上、下2巻の名著も出版された。その東京齒科医学専門学校の口腔外科学の教授であって、内外に名声も高かった。昭和時代になってから出版された「女性と口腔齒牙」「黴毒と口腔齒牙」

などの貴重な著書は私も（注：今田見信先生）販売に一役つとめたが、ひろく愛読されたものだ。関東大震災の直前、高山紀斎の銀座診療所を譲受けて福島医院（口腔外科、歯科併設）を開かれたが、大震災のため烏有に帰してからは、小石川駕籠町に医院を再開され、昭和7年末頃に小石川原町に新しく、近代設備をととのえた病院を建築されたが、移転されたばかりで病床の身となられ、東大塩田外科に入院手術されたが、遂に薬石効なく惜しくも逝去された。病気は胃癌であったと記憶する。昭和8年4月4日没せられた。福島博士は島峯 徹博士と同期の東大卒業であるが、両先生は深く交友することもなく、お互いに別々な道を歩んでいかれたというエピソードを残されたまま他界された。ともあれお二人ともわが国歯学に貢献された業績には貴重なものがあって面白いと思う』と記されている。

そのうち、第15回（昭和62年度）本学会において吉村は福島尚純編、近世医学叢書、第拾壹編、下顎関節炎及牙関緊急（明治42年11月3日発行、南江堂）を資料とし、その内容を報告した。また、第16回（昭和63年）本学会において森山らは『福島尚純著「臨床口腔外科講義集」第I輯（明治42年3月11日発行）、第II輯（明治44年3月15日発行）および「歯科外科学全」（大正2年11月27日）の書誌学』と『「口腔外科学第一（大正4年3月15日）・第二巻（大正4年11月10日）」およびその後の著書の書誌学』について報告し、「女性と口腔歯牙」（大正14年1月1日刊）、「抜歯創の合理的処置」（昭和3年7月刊）、「黴毒と口腔歯牙第一」（昭和5年1月刊）など、東京歯科大学図書館の蔵本をもとに報告している。また、山口らは「袖珍外科總論」（大正元年9月4日刊）を追加発表している。

演者らの一人谷津が架蔵する福島尚純、加藤辰三郎編纂『最近鬱血療法』は、洋本、全269頁、明治40年4月9日発行、22×15cm大、金1円20銭、金原医籍店発行であるので、福島が東大を卒業して2年後の出版である。その「自序」に「今や鬱血療法の聲天下に喧しきの秋、之を知らんと欲するの念切なり、されど邦文を以てせる書なきを恨み、ビール氏の著書及び幾多の成書を渉獵せしに稍得る所あり、偶々書肆の乞にまかせて、該療法の餘波を我學海に傳へんとて、不才をも省み

ず、此小冊子をものするに到れり、されども吾人敢て之が経験に富めると云ふに非ず…終りに臨み婦人科に於ける適用は其の専門なる木内學士の擔任を勞せるを深謝する處なり」から本書の出版の意図を知る。第一章は「第一節充血ト生活現象トノ重要ナル關件、第二節人工的鬱血ノ作成、充血ノ種類、第三節静脈性鬱血ト生理的關件并ニビール氏鬱血ニ付キ、第四節自働的充血ノ發生、第五節熱氣療法ノ装置、第六節温氣浴ノ身體ニ於ケル局所的並ニ全身的影響ニ付キ」、第二章は「第一節受働的鬱血ノ發生、第二節鬱血帶ニ由リテノ四肢ノ受働的鬱血、第三節大吸引装置ニ據リテノ鬱血、第四節乾性吸角ニヨリテノ鬱血」、第三章鬱血ノ一般効用は「第一節鬱血ノ鎮痛作用、第二節鬱血ノ殺菌或ハ毒性稀釋作用、第三節鬱血ノ吸収作用、第四節鬱血ノ融解作用、第五節鬱血ノ營養作用」からなる。ここまでは総論的事項で、次いで、第四章鬱血療法各論は「第一節種々ノ疾病ニ對シ鬱血療法ノ處置ニ付キ、第二節局所感染疾患ニ向ッテ鬱血療法ヲ適用スルニ當リ其鬱血ノ種類撰擇ノ事、第三節鬱血帶ノ適用、第四節婦人科ニ於ルビール氏療法、第五節中耳ノ膿腫症及ビ其併發症、第六節吸角吸吮療法、第七節熱氣療法、附録充血惹起ニ由リテ淋巴流ニ及ス影響」に分類されている。歯科における鬱血療法については記載されていないが、各論の第七節熱氣療法中の第六神經痛の項に「病理解剖的變化ヲ有セザル局所ノ疼痛ニハ偉効ヲ有ス、腰痛、坐骨神經痛、三叉神經痛ニハ他ノ醫藥ニテ治癒セザルモノモ熱氣浴ヲ以テ良果ヲ得タリ」をみるに過ぎない。しかし、本書については今まで報告したものはなく、また、出版年月日より福島処女出版と思われる。この点本書は福島尚純の人物史上貴重な資料といえる。

その他今田見信先生旧蔵本中に、福島尚純著『人工乳嘴吸啜癖に由来する口腔領域の畸形、重複唇紅症一口唇粘膜弛垂症と唇紅部醜形美容整調手術に就て』大正15年12月10日発行、テラピー、第3巻第12号別刷、12×22.5cm大、全21ページで、東京小石川駕籠町福島口腔外科医院臨床があり、本書も稀覯本のひとつといえる。